

〔翻 訳〕

ファウスト救済の秘儀について

カール・ヴォルフ

溝 井 高 志(訳)

ゲーテはかつて「純粹に人間的なものの勝利」が自分の著作の意味であると説明した。彼は同じ言葉によって自分の全存在の意味を特徴づけることができたであろう。『穏和なクセーニエン』の中の一つの箴言が彼の最も深い内面の確信を吐露している。

ひそやかに自らを純粹に持し、
回りの世界は荒れるがままに任せよ。
いやましに人間であることを深く感ずれば
感ずる程に、
一層おまえは神々に近い。

ゲーテの生と創作活動を力強い底流として貫通するものが当然のことながら彼の『ファウスト』においてとりわけ明瞭に示されている。この類い稀な作品の意味もまた「純粹に人間的なものの勝利 (der Triumph des Rein-Menschlichen)」(これ以外にはより以上に適切な定式は考えられない)である。

この「純粹に人間的なものの」とは何か？

それは分析する思惟によって獲得される抽象的な概念ではない。このような概念は決して生き生きとした芸術作品の内容を表現するものではありえない。

それはまず道徳的な純粹さとも関係がない。悪と道徳的に欠陥あるものとは何らかの形で内的に帰属しあっている。

「純粹」ということはここではむしろ(ほぼ)化学がその言葉を用いているような意味におい

て)混じり気がないということ、はっきりしているということ、歪められていないということの意味している。純粹に人間的なるものの中で、人間の本質と人間を規定するものの際立って類い稀なものが現象となってあらわれる。

人間はあらゆる地上的なものに関与している。それは人間の中の動物的なものであり、植物的なものであり、そしてその人間の身体の構成要素たる質料的な要素はあらゆる物質の法則に隷属している。しかし同時に人間はあらゆる生の中に、そして地上的なものを越えた連関の中に組み込まれている。その連関なるものはただ極小部分においてのみ透視せられうる。時間的、空間的な距離によって、星辰の位置が彼に影響を与え、その放射する光が彼に作用する。一層深く考察すれば、人間は精神的な類いの宇宙的な諸力というものがあつたという確信に達する。たとえ人間がそれらの諸力を神あるいは悪魔、天使あるいはデーモン、運命あるいは摂理として把握しようとも、人間はいずれにせよこれらの形象と比喩によって、何らかの超人間的なものの影響を現実のものとして感じ取るということを自ら確信する。

このように存在と力がぶつかりあう中にあって、あらゆる相反するもの、つまり上なるものと下なるもの、光と闇、精神的なものと物質的なもの、上昇と重さといったものが出会うところの中心点に位置する被造物として人間は立っている。人間は悲惨であり、かつ偉大であり、低きものであり、かつ崇高であり、無力であ

り、かつしたたかな存在である。人間の中にはどうしようもない分裂と、同時に統一と救済への力強い衝動がある。

対立のこの緊張から存在の領域にあって専ら人間に留保せられ、課せられてある一切のものへの衝動と能力が芽生える。一層深い層へと沈潜することとなしに、一層高い層から助けを得るということとなしに、人間が己れにのみ固有のものを開陳し、あらゆる力に抗してもなお、それを示して見せるとき、これこそが「純粋に人間的なるものの勝利」であると言うことができる。

純粋に人間的なものとはそれ故に考え出された概念でもなく、理想的な典型というでもない。それはゲーテも言うように、一つの「原現象 (Urphänomen)」なのである。そのようなものとしてそれは悟性によって把握されるものではなく、それはただ直観によってのみ把握されうるが、そのような直観には個々の個別的な形成物は完全に相応してはありえない。このことはゲーテの「原植物」と似た事情にある。原植物もまた一定の個々の植物の中に体现するのではなく、ただ単純な基本的な形として予感して把握され、それは植物の形成物の無限の多様性において常に新しい変化の中で姿をとって現われる。

あらゆる形態は似てはいるが、どれ一つとして同じではない

かくて一切の群れは一つの隠された法則を、一つの聖なる謎を指し示す。

この隠された法則と聖なる謎とは、たとえあらゆる人間にあって感じ取られるものではあってもなお、いたるところで同じようにはっきりと現実化せられるものではない。それ故に、象徴的な力がとりわけ強く現われる事例、即ち、他の多くのものを代表するものとしての特徴的な多様性の中にあって、ある種の全体性を自身のうちに含み、ある種の一聯のものを要求し、私の精神の中に似たものと見知らぬものと呼び

起こし、外からも、内からもある種の統一性と全体性を要求するようなそのような事例こそがそれだけにいよいよ重要である。

そのような「際立って優れた」事例がファウスト劇において顕著に示される。ファウストが「人間性を代表するもの」であり、「努力し、迷える人間の典型」であるというような好んで口にされる定式がどの程度まで正当なものを含んでいるかということは追って検証されなければならない。しかしそれだけに既にこの時点において、世界文学と呼ばれるいかなる他の文学も地上的、かつ宇宙的な領域での人間の特殊な位置付けをかくもはっきりと明らかにして見せていることはないだけは我々は言うことが出来る。

ファウスト劇は一つの秘儀 (ein Mysterium) である。即ち、ここでは人間のみならず、人間を越えた諸力もまた問題になっている。これらの諸力はただ象徴を通してのみ直観せられうる。しかしこのような象徴は単なる幻影ではないし、内容に乏しい寓意でもなく、現実を代表して指し示す印であり、それはなるほど概念的に定式化されることは出来ないが、しかし現実のものとして体験せられうる。「神秘的なものと同一の真実なものは決して我々によって直接認識されることはない。我々はそれをただ反映する光の中で、例えば象徴の中において直観することができる。我々はそれを概念化しえない生として知覚しはするが、それにもかかわらずそれを概念化して捕らえたいという願望を断念することができない。」(気象学の試み、1825年) 「我々は一切を秘密へと変じる」と1827年10月7日にゲーテはエッカーマンに語っている。「我々はある種の雰囲気の中に包まれてはいるが、それは、その中に何が働いているか、それが我々の精神とどのように結び付いてあるかを未だ我々が完全には知ることがないようなそのような雰囲気なのである。」

ファウスト劇は、地上的な出来事が地上を越えた出来事に如何に制約されてあるかを指し示

す。しかし同時に（そしてこのことが決定的に重要なのであるが）「地上圏」はそれ自身でやはり固有の価値と固有の法則性を備えた自己閉鎖的な世界（eine in sich geschlossene Welt）として現われる。偉大な観る人であるゲーテ、自然と人間を愛するゲーテは地上的な舞台にその自立と矜持を認めた。それは彼にとってただ単に前景としてある場所でもなければ、通りすがりの場所の類いのものでもない。地上的な生は混乱した仮象、混乱した夢へと雲消霧散していくようなものでもない。『ファウスト』は我々の行為と体験が**二重の意味を**、即ち、宇宙的な意味と純粋に人間的な意味をもっていることを明らかに示している。

かくてファウスト劇のそれぞれの場面がまた二重のやり方で考察されることが可能となる。例えばグレートヒェン劇は宇宙的な連関の中で考察されるならば、決して悲劇ではなくて、清澄へと至る道筋であり、それは第2部の結末の場面が我々に示して見せているように勝利と栄化へと導いていく過程なのである。しかしそういう理由のために、それは純粋に人間的に見られるならば悲劇であることを止めるわけではない。地上を越えた世界へと眼差しを向けることでこの苦難に満ちた地上的な運命からその鋭利さと苦渋を剝奪してしまおうとすることはほど逸脱したことはない。かくて、それが、たとえ全体との連関の中で見られるならば、吹きかける息によって生じる束の間の鏡の曇り以上の意味をもつことがないにしても、ここにおけるように、いたるところで我々は人間的な苦しみ、迷い、罪をその完全な恐るべき厳粛さにおいて感じ取ることをしなければならぬのである。

この二重の視点において一人の人間の生の全体を見つめる可能性を、ファウストの秘儀は**天上の序曲**を通して我々に与えている。ここでは我々は神の秘密を共に知ることに関与する者となる。そしておそらく——突然の天的な照明の稀な瞬間における以外には——我々には常に接する機会が拒まれてあるような一切が一度は我々

に恵みとして与えられる。それは上からの眼差しであり、そのような眼差しには、地上的なものが同時にその極小部分にいたる迄、しかも最深の意義をもって永遠なるものの比喩としてあらわとなる。

一人の人間が舞台に登場する以前に人間というものの本質が序曲において論議される。

対等のパートナーの会話なるものはここにはない。主と大天使に対立するのはただ悪魔の王国の一人の代表者のみであり、いずれにせよ主と大天使に対立するような「偉大な者は誰も存在しない。」地獄の王であり、神に敵対する者としてのサタンはここには登場しない。自立する悪魔の力といったものはこの詩人の後期の神概念及び自然の概念とはもはや一致することがない。

ゲーテを一定の種類の宗教、例えばスピノザ的な色彩に彩られた汎神論といったものに固定しようとする試みが繰り返さされる。にも拘らず、彼はあらゆる言葉と定式がこういった事柄に対して無力であることをあまりにも深く確信している。「一体神的なるものの理念について何を我々は知っているというのか。そして一体我々の狭隘な概念が至高の存在について何を語らんとするのか！私がトルコ人と同様にそれを百の名前で呼ぶとしても、それでは余りにも舌足らずでありすぎるし、そのように際限のない特性を前にしては、我々は何も言っていないのに等しいであろう。」それ故に、我々は比喩的な暗示にたよらざるをえないが故に、種々の目の前に現れてくる形象の中から、その時々々の要求に最も適したものを選び取ることを絶えずゲーテは自ら正当なことと見なしてきた。彼はそのことを最もはっきりと1813年1月6日のヤコービ宛の手紙の中で書き記している。「私自身としては多様な方向へと向かう私のその本性の故に、私は一つのものの考え方で満足することが出来ません。詩人、そして芸術家としての私は多神論者であり、それに対して自然の探究者としての私は汎神論者であって、それぞれがはっきりしています。もし私が道徳的な

人間として私の人格のために一なる神を必要とするなら、それはそれで何とかなります。天上的な、そして地上的な事物の世界は広大無辺な王国であって、その広大さはそれを把握し切るのにあらゆる存在の器官が挙げて必要とされる程なのです。」

このようにいわゆる「汎神論者」たるゲーテの著作と会話の中にまさしく「有神論的な」敬虔な発言がいたるところで散見されることは明らかである。天と地の創造者である**人格神**についての発言が彼によって無数に為されている。しかし『ファウスト』における程に、それが顕著に見られる例はない。とりわけその序曲においてすでに「主」は完全に「人格」神として現われてくる。秘儀の結末もまた、たとえここではもはや神自身が直接介入してくるということはないにしても、それは汎神論的な神及び自然と一致することはありえない。しかもグレートヒェンとの教理問答におけるファウストの次のような素晴らしい言葉を「汎神論としての信仰告白」として解釈しようとするほど不可解なことではない。

誰が彼をどんな名で呼ぼうというのか？

しかも彼を信じるということ

誰が口にすることができるのか？

その存在を身近に感じながら、

それでいて誰があえて彼を信じないなどと言うことが出来るのか？

あらゆる存在をしっかりとかき抱き、

支えるもの、

彼はお前を、私を、そして彼自身をさえかき抱き、支えてはいないのだろうか？

非人格的な、自然と同一な神性がこんなふうに表示して口にされるものであろうか？ 勿論そういう理由の故にゲーテに「有神論者」としての烙印を押してしまうこともまた同様にお門違いであろう。しばしば言われるように、彼自身の瞬間的な体験に最もはっきりとした表現を与える定式を彼は用い、あげくに彼はまた

ファウストをしてグレートヒェンとの会話において次のように言わしめている、

私はそれに対して名づくべき名を知らぬ！

感情こそが一切だ

名は響き、煙、

天の灼熱を覆う霞だ

と。

ファウストはグレートヒェンと敬虔な教会の信仰を分かち合うことができない。しかし彼が自らの信仰告白を披瀝するその形式は必ずしもキリスト教的な神の理解に**原則的に**矛盾するものではない。それ故に、

牧師様もおおよそそういったことをおっしゃいます。

けれど、もう少し違った言葉でおっしゃいますわ。

とグレートヒェンが答える時、ここでは極めて微妙な感情が吐露されている。それに反して、もし彼女が彼の「汎神論的な」信仰告白から牧師の説教と同じ響きを聞き取るとしたら、彼女はとんでもないお馬鹿さんということになるろう。

神的な力に満ちあふれた万有の中であって、神が戦いを挑み、終局にあって自らが唯一支配者であらんがために、ついには組み伏し、勝利しなければならぬ相手となるような自主独立の敵対者なるものが存在する余地はどこにもない。独自の中心点をもつ一つの圏内として神的な圏内に対立するような悪魔の王国なるものは存在しない。唯一、神に対等な立場に立ちうるのは、もし神の本性が己れと二つに分かれうるとするならば、神自身であるということができよう。これが、ゲーテが自らの自伝の第四章の冒頭に先立って掲げてある「特別な意味をもつ、しかし非常に重要な『神自身の他には神に敵対するものはいない (Nomo contra Deum nisi Deus ipse)』という格言」の意味すると

ころである。

あらゆる存在は神に満たされており、神に捕らえられてある。「ファウスト」の序曲は、悪魔でさえもが神の目的の連関の中に組み込まれてあることを示している。これが多くの解釈者に、ゲーテの「楽観主義 (Optimismus)」について発言する好都合なきかけを与えている。勿論ゲーテの根本的な視点から導き出されてくる存在するものの絶対的な肯定は、この世界から禍と悪の恐るべき現実を取り去って解釈しようとするような欺瞞的な綺麗ごと (die verlogene Schönfärberei) とは根本的に違っている。

この意味で『ファウスト』の序曲は「楽観主義的な (optimistisch)」なものではない。むしろゲーテは敢て彼なりの「穏健なやり方」古い宗教の多くがもっと大胆なやり方で敢えて試みたのと同じことをここで試みている。たとえばあらゆる生が神から出て、神へと還流していくとしても、それでもって一切が「善し」とされるのではない。我々は禍に満ちたもの、破壊的なもの、悪もまた神から出てくるという推論を前にして、尻込することがあってはならない。我々はその責任を神の外なる力に転嫁してもならないし、それが禍に満ちた、破壊的な、悪しきものとしてもはや現われてくることがないというふうに曲げて解釈することがあってはならない。既に23才のゲーテが『フランクフルト学芸通信』において「我々に不愉快な印象を与えるものが自然の摂理にあっては最も好ましいものとして組み込まれてあるというようなことが果たしていないものかどうか？」と書き記している。荒れ狂う嵐、洪水、火の雨、地下の灼熱、あらゆるものの中にある死の要素が、壮麗に昇る太陽、豊饒な葡萄畑、香りに蒸せるオレンジの森といったものと同様に、永遠の生の真の証であるというようなことが果たしていないものであろうか？……我々が自然の中に見るものは、力を飲込む力であり、現在的な何物でもなく、悉くが過ぎ去るものであり、たとえ踏み躪られても、また常に瞬時に生れ出る数限りない胚珠であって、かつ偉大であり、意義ある、無

限に多様な、即ち、美しいと同時に醜い、良きものであると同時に悪しき、一切が同等の権限をもって併存しうるものである。

『ファウスト』の序曲において、大天使達の歌声に限なき空間の調和と天国の明るさのみならず、恐ろしい夜、荒れ狂う津波、そして破壊的な稲妻について告げ知らせていることと、この上に述べた諸命題とは精確に軌を一にしている。またははっきりと次のように言われる、

そしてあらゆる主のみ業は
初めの日と同様に壮麗である

と。

人間的なるものの領域においてのみ——それ故に地上で演じられるファウスト劇においてもまた同様に——倫理的なるものの価値が決定的に重要な役割をもつことになる。倫理的なるものの価値を最高の存在そのものに持ち込むことは——指導的な役割をもつ宗教もまたしばしば自らの神概念の「倫理化 (Ethisierung)」を誇らしげに口にするものであるが——許し難い神人同形論 (Anthropomorphismus) であり、それは更に敬虔なる心情をして苦痛に満ちた、解き難い問題の紛糾の中へと巻き込んでいくものである。

そのことと序曲において主が最高の英知と善の権化として現われることとは矛盾しない。というのもまずゲーテは実際主をしてやむなく「人間化する」ように強いられ、加えて主の言葉においては専ら人間の本質と人間に関する事柄が問題となっている。大天使の賛歌は道徳的なものに関与することをしない。だがメフィストフェレスは特殊な種類の悪魔であって、自然は殆ど彼の関心を引くことがなく、彼の情熱が向かうのは専ら人間に対してである。

太陽と世界のことなど何も俺には分らぬ。
俺に分かるのはただ人間が悲嘆にくれてい
るということだけだ。

彼に相応しいのは何が人間にとって本来的であり、何が人間にとって妥当するかについて語ることだけである。メフィストフェレスが最後に主が非常に「人間的に」語ってくれたと言っているのは二重の意味において正しい。その語る言葉の調子も人間的であり、そこで語られるテーマもまた人間的である。

ゲーテの確信によれば、しばしば言われるように、神的な「然り (Ja)」に対立する独立自存するサタンも、また徹底した「否 (Nein)」も存在しはしない。「否定する精神 (die Geister, die verneinen)」は直接神そのものには向かわない (唯一そう解釈し得るような言葉をメフィストフェレスが語っていることは事実である)。それらの精神はただ神的な創造をかき乱し、破壊するのみである。そしてそれらの精神にそれが可能であるのは、創造そのものが否定の要素を内に含んでいるからにはかならない。そしてその否定の要素を悪魔的な本能は確実に嗅ぎ取る。

神的な本性は制限されてはいない。しかしあらゆる被造物は必然的に制限されている。制限なしには区分された宇宙も、個別的な形態も、歴史的な経緯もまたありえない。しかし制限は絶えず否定である。それは分離し、排除する。神から見れば、あらゆる個物は同様にこまぎれであり、破片であり、惨めな断片である。これが生けとし生けるものに固有の悲痛に満ちた根源的事実である。ここに制限の、しかも二重の制限の苦痛の感情の根拠がある。というのも我々はまさに人間であり、加えて我々の誰もがこの一人の特殊な人間であるにすぎないからである。ここに精神的な (geistig) 狭隘さの結果である誤りの根拠があり、それは罪が魂の (seelisch) 狭隘さに由来しているのと同様である。罪とは言葉の上から言って、「区別する (sondern)」ということと不可欠である。制限された自己を肯定する意志は自分自身を他から切り離し、永遠の感覚と法則との関連を見失っている。

従って、否定する精神はその営みにおいて実

際、世界の本質に属するものに結び付きうる。制限がそこにある。そしてそれとともに不足と無力と欠乏がそこにある。創造されたものの圏内に制限されないようなものは何一つない。全体的なもの、完全なものへのすべての衝動にはどこかに停止が、従って「否」が対立している。そして悪魔の態度はただこの「否」を肯定するところにある。それ故に、存在と事物の「弱い側面」に対してその鋭い、そしてその容赦のない眼差しが向けられる。ただ制限されてあることとあらゆる人間の努力の「相対的なもの」の知を通して、彼は試誘者あるいは誘惑者として危険な存在となる。

しかしまさにこの相対的なものの肯定こそがどうしようもない程に馬鹿げたことであり、それはまさしく真に悪魔的な「倒錯 (Perversität)」である。悪魔は、神の創造の中では相対的なものが自立した存在をもたないことを見ない。彼はあらゆるものの中に貫通し、あらゆる限界を越えてあふれ出す絶えざる生成の流れを見ることをしない。彼は絶えずただ事物の一定の側面にのみ固着する。それ故に、彼の「確信」は彼が知ることのない、計算にも入れることのない可能性によって繰り返し台無しとなる。言い換えるなら、あらゆる被造物の限界性を性急に利用しようとして、悪魔は、限界そのものが生きた、活発な、流動的なもの、生成の流れの中の波立つ姿であるということを見落としている。

形成と変態,

それは永遠の意識の永遠の戯れ

メフィストは後に、ファウストとの最初の会話で、彼の「世界観」の逆転を意に反して示して見せざるをえないはめになる。彼は「無」を根源的なものとして示そうとして、「有」とその優位を争わせるが、それを彼は、光が夜から出てくるが故に、光が根源的な母なる夜に対してもつ関係と同じであるとしている。事実彼の言うとおりであるとするならば、勿論あらゆる否定

と破壊は初めからその存在が正当と見なされ、

生成するものの一切は

滅びる価値がある。

だから何も生じないほうがよかったのさ。

という命題が論駁し難いものとなる。しかし苛立たしげにメフィストは次のように言う、自分はそれにもかかわらず、つまらないことをしでかすばかりで、結局は「全体としては何も合無しには出来ていないのだ」と。個々の事物と生物の破壊と死こそが彼が引き起こしうる唯一のものである。しかし彼の関与がなかったとしても、それらがそれ自身としてもつ制限の必然的な結果としてそういったことはやはり起こりうるのである。全体としてみれば、この「不格好な世界 (plumpe Welt)」は依然として不可侵 (unantastbar) なるものである。

俺がいかに手出しをしてみたところで、その度ごとに

俺には何もできていないということを思い知らされる。

津波を、嵐を、地震を、火事をもってしても駄目だ。

海と大地は結局のところビクともしない！
そして畜生や人間の族ときたら、いまいましい奴らめ、

まるで何食わぬ顔をしている。

奴らのためにどれ程俺は骨折って墓穴を掘ってきたことか！

相変わらず、生きのいい奴がまたぞろ生れ出てくる。

こんなことがいつまでも続くようでは、頭にくるっていうものさ！

大地からは勿論、大気や水からも乾燥しようが、じめじめしようが、寒かろうが、

幾千の芽が吹き出してくる！

火でも取っておかなかったら、俺には何も残ってはいなかったろうよ。

ここで悪魔の口から突いて出てくるのは、尽きることのない、破壊され尽くされることのない生命への渋々ながらの賛歌である。彼なりのやり方で彼はそれを口にしているのであり、忌ま忌ましげに呪いながら、彼は創造の働きを誉めたたえている。しかし「津波が、嵐が、地震が、火事が」いかに彼によって破壊の手段として評価されようと、それは大天使がその賛歌において神の栄光の啓示として誉め称えたものとまさしく同じ力なのである。メフィストにとって、醜い、無意味な有象無象と見えるものの中に、天の軍勢は「永遠に働き、そして生き、生成するものの働き」を認める。そのことで怒り、空しく苦勞する悪魔が、しかし彼なりのやり方でのみ一つの「課題」に奉仕していることを、彼は渋々認めざるをえない。

似たような告白を、婉曲的にではあるが、序曲において彼は既に行っている。

お前が地上に生きているかぎり、

おまえの好きなようにするがよい、——

という主の言葉を受けて、彼は大喜びで答えている。

感謝しますよ、旦那。死んだものを

相手になんぞはしたくはないですからね。

ふっくらした、生きのいい奴をお願いしたいもんです。

死人なんぞはくそくらえだ。

手前は鼠相手の猫といきたいもんです。

これは、言い換えれば、生命を破壊する目論見がその実、生命を前提とせざるをえないということ以外のことを意味してはいない。悪魔の「否 (Nein)」は神の「然り (Ja)」に基づいている。神を通してのみ悪魔もまた可能なのである。

メフィストーフェレスの精神的な構造は専ら、彼には「全体 (Ganzheit)」への感覚が欠如しているということによって規定される。彼

の強みは分離し、分析する悟性にある。そして彼の批評家としての才能は、どぎつく光を当てて一定の側面から対象を見るその能力に基づいている。彼はばらばらにされた部分をそれ自身で、あるいは他のばらばらにされた部分との関連において判断を下す。生きた全体はこのように部分からは成り立っていないということを彼は見落としている。彼は分析家である。しかし彼には総合の才能(die Gabe der Synthese)が欠けている。

そういうことから、例えば、愛の現象に彼が全く通じていないことが説明される。彼は愛を理解しない。けだし愛とは生きた統一の表現(ein Ausdruck lebendiger Einheit)であって、愛はただ肉体とか、魂とか、特定の長所とか、個々の特性にのみ向けられるのではないからである。愛する者は自らの全存在が捕らえられてあるという実感に浸され、自ら愛する者の全存在を捕らえ切るまでは休らぐことがない。悪魔はしかし愛を解体し、その中にまたその構成要素として性的な欲求を、感性的な快楽を見て取る。この唯一の要素をのみ彼は生きた関連の中から取り出し、勝ち誇って叫ぶ、「これだけが所謂愛の『確かな現実』』というやつで、他のものはすべて妄想、まやかしであり、あるいは自己欺瞞である！」と。

或いは、メフィストフェレスは人間の中に際限のないものへの衝動を見出す。しかし勿論、人間が同時に限界の中に縛られてあることを彼は見逃しはしない。再び悪魔は瑣末なもの、無力、制限をのみ「現実的なもの」として認めることによって、複合体の中から個々の要素を取り出す。そう見られるならば、あの灼熱する興奮、無限なものへのあの自己拡張、自己拡大は、虚ろな、無駄な、愚かしい興奮として見えてくる。

悪魔の批評が正鵠を射ている場合があることは明らかである。つまり、人間がただ単に相対的なものをあたかもそれが全体としての現実であるかのように見做すメフィスト的な過ちを自らしでかすところではどこでもそのことが言え

る。人間がおよそ愛を単なる熱狂に変え、あらゆる感性的なものをそこから締め出そうとする時に、或いは熱狂的な興奮の故に、自らが地上的なものにつながれてあることを人間が忘却する時に、メフィストフェレスは皮肉な喜びをもって「他の一面」へと人間の眼差しを振り向ける。そのとき彼は、あらゆる幻影が泡沫の如くはじけ散るかのように実情を針付けにしてみよう「現実主義者(Realist)」である。そして人間にとってあらゆる地上的なるものの不十分さが破滅に瀕し、結果として人間がよろめき、おそらくは動物的或いは悪魔的な圏内にまで転落する時、その時地獄の霊は人間の本来的なものがようやく明らかになったと確信する。

かくしてメフィストフェレスにとっては、人間によってなされるあらゆる悪しき事柄が、人間の身に降りかかる一切の悪しきことと同様に、自らの悪魔的な「相対性の理論(Relativitätstheorie)」を裏付け、実証するものとなる。それ故にまさに彼は「恥辱を喜び、破滅に舌なめずりする卑劣漢」なのである。彼は「根源的な悪」を代表するものではない。そのようなものはゲーテの確信によれば存在しない(そして彼はカントの学説の中のかかる考えを徹底的に拒否する)。悪に対する喜びは地上の人間的な圏内の外部においても生起する災いに対する喜びと同じ根拠をもっている。この両者を、この否定する精神は、相対的なものにのみ、基本的にはそれにのみ現実が基づいてあることの証とする。

それ故にメフィストフェレスはゲーテ的な意味において「デモニッシュな」存在ではない。ゲーテはそれを強く主張する。メフィストフェレスがデモニッシュな特性を備えているかどうかとエッカーマンが尋ねた時に、ゲーテは次のように答えている、「否、メフィストフェレスはあまりにも否定的な存在でありすぎる」(1831年3月2日)と。だがデモニッシュなものは極めて積極的な行動力において自らを表現する。このことと、序曲において主がメフィストフェレスをもまた「悪魔として働

か (schaffen)」なければならないと言っていることは矛盾しない。悪魔は勿論働かなければならないというのは、この場合、神の目的に仕えるために活動し、極めて意に反してのことではあるが——働かざるをえないことを意味している。彼は「何年も何年も」繰り返す同じ経験をしてきた後で、自らこのことを認めている。しかしそれによって、彼の本性が変わるわけでもないし、ファウストをめぐる彼の実験から明らかなように、自らの意志によっていつかは「自分自身の目的に達する」であろうという希望が彼から剝奪されるわけでもない。

彼が自らを「絶えず悪を欲して、善を生み出す (schaffen) 力の一部」と称している時、それは極めて苦い自己へのアイロニー (Selbstironie) である。それにも拘らずたとえ悪魔が「善 (Gutes)」を生み出すとしても、それは卓越した神の計画の結実であり、そしてそれはあらゆる善とあらゆる生命と同様、悉く悪魔自身によって否定される。

主がメフィストーフェレスによって意に反して為される働きとして挙げている例は勿論注目し値する。

人間の活動は余りにも容易く弛みがちである。

彼はすぐに無条件な安息を好む。

それゆえに私は進んで刺激し、働きかけ、悪魔として働く (schaffen) 道連れを彼に与えよう。

この例がそのままファウストに当てはまらないことは疑いをいれない。ファウストの本性が弛み、そして無条件に安息を好むという危険にさらされるということは全くありえない。最高の知恵がひょっとして誤解を招くような例をあえて挙げているのであろうか？ 最高の知恵が注意深い悪魔に彼の企みを前以て止めさせるような合図をすることを回避しようとするのであろうか？ 悪魔は確かに自らの試みをやって

みて、そのことで彼は挫折するはずである。

これによって、否定する霊をして好きなようにやらせるという主の素晴らしい無頓着さもまた説明される。それらの霊のやること、為すことは、それがたとえどのように生じてくるにしても、結局は創造の生の圏内の中にはまり込んでいくのである。否定する霊は宇宙的な収支決算の中ではただ単にすすんで親父の秩序の枠組みの中に入ろうとしない駄の悪いやんちゃ坊主にすぎないのである。それらの霊は確かに時折りは「お荷物に」なることがあるにしても、メフィスト的な類の霊はお荷物とはいえおよそ取るに足らないお荷物である。メフィストは「いたずら小僧」である (主の前では確かに彼はそのようなものとして現われるが、人間世界の中ではともかくも十分なだけ彼は禍をつくりだしている)。彼は機知に富み、活発で、器用で、多彩な、洗練された悪意である。彼は神の目から見ればまた退屈をさせないという利点をもっている。

神とこの悪魔の間に「賭け」が成立しえないことは初めから分かっていることである。メフィストーフェレスがそんなことを言い出すのは、一瞬なりと (たとえそれは見かけのうえだけのことであるにしても) 主と同じ高さに立とうとする恥知らずな試みにすぎない。

このように無限に立場の違った相手同志の間では賭けというものは考えられない。更に加えて、賭けをする者が勝負を決める事情について前以てはっきりした認識をもっていないということがあらゆる正当な賭けをする上での第一の前提である。しかし一切を知る主が未来のことについてははっきりと知らないというようなことがどうしてありうるであろうか？ しかも万能の主によって結果を前以て決められていない始まりといったものがどこにありうるであろうか？

主は実際確かに賭けをするかのように受けとられる言葉を一度は吐いている、これは事実である。主は悪魔に、一定の期間だけファウスト

に彼の誘惑する術を行使することを試みてよいとする許可を与えている。誰の目にも——ここで「馬鹿な悪魔」であることを（後にしばしば見られるように）自ら実証して見せているメフィストーフェレスを除いては——終りがどうなるかについては、疑問の余地が無い。耳を傾けるすべての者に前以て神の言葉は、地獄の霊が決して「自分の目的に達する」ことがないということを告知している。『ファウスト』の秘儀は、全体として見るならば、劇的な緊張の契機に欠けている。地上で繰り広げられる争いの個々の局面だけが緊張をもっている。我々が「人間を人間的に見る」場面においてのみ戦いと苦しみの深い深刻さが明らかとなる。宇宙的なドラマである作品全体はしかし悲劇 (Trauerspiel) ではなく、最も高い次元での「神的な喜劇 (eine göttliche Komödie)」なのである。

「そもそも何故に悪魔の戯れが許されるのか」という問いがここに挙げられる。

メフィストーフェレスの教化——それとも全くの転向であろうか——が狙いであるといったことがおよそ考えられるであろうか？

そしてお前は、
良い人間はたとえ暗い衝動の中にある時も
正しい道を忘れぬものだ
ということを認めて、恥じ入るがいい。

ここで繰り広げられる複雑な問題に立ち入ることはずっと後になってやっと可能であろう。ファウストの本性と態度がまさしく主の言葉に相応するかどうか、そして実際最後には悪魔が「恥じ入る」ことがあるかどうかについてはいずれ検証されなければならないことである。

差し当たって我々は極めてメフィストらしい次の答えを聞くのみである。

ようがす！ ただ手短かに願いたいもんです。

いたるところに「相対的なもの」のみを見るメフィストーフェレスは主が問題とする人間の

魂の力もまたやはり相対的なものに過ぎず、制限され、持久力がなく、やがては絶えず繰り返し萎え、衰えてしまうと信じ切っている。

否定する精神がいつかは違う考え方をもつにいたるということ、違う態度をとるようになるというようなことはおよそ期待することができない。彼には発展していくという能力が欠けている。彼が「真の神の子」のように永遠に活動し、生き、生成するものに関与するようなことはありえない。

それ故に、次のような問いかけは依然として残る。即ち、「何故にそもそも悪魔的な戯れが許されるのか？」と。

悪魔に許される実験の一層深い意味とは一体なんであろうか？

メフィストが人間とはいかなるものか、即ち一応ひとかどのものではあるが、かと言って格別のものでもない、不幸な中途半端に造られたものだと言った後で、主は初めてファウストの名を口にする。人間は神性と動物の間を不安定に揺れ動き、極めて巧妙なやり方で何とか彼等の「惨めな日々」を引き延ばしはするが、それがかえって地獄の苦しむ霊にさえグロテスクな憐愍の情を引き起させる。

「ところでファウストを知っているか？」というメフィストに対する主の問いは従ってただ「人間一般についてお前の言うことがそのまま彼にも当てはまるのか？」という意味を持ちうるのみである。それをうけて悪魔はせき込んで答える、「そうですとも！ しかもそれがまた極端ときているんですから」と。彼はあの一般的な一人間的な特徴が最も際立って、著しく認められるファウストの横顔を描き出して見せる。一致することのない衝動である上に向けての自己拡張的でありながらなお欠けるところのある力と下へと自己傾斜的でありながら、しかも不十分な勇気の癒し難い分裂をファウストの本質の中に、メフィストは特にはっきりと見てとる。しかもそこに人間の己れの「狂気」についての苦悶に満ちた知も見られはするが、その知

もまた（あらゆる人間的なものと同様に）制限された、「半端な」ものに過ぎない。

あの馬鹿の飲むもの、食べるものはこの世のものではない。

沸き立つ思いが彼を遠くへ駆り立て、
彼は自分の気違いじみていることを半ばは知っている。

天からは最も美しい星を求め、
地上からはあらゆる極上の楽しみを求め
る。

どんなに身近な快楽も、どんなに遠くの楽しみも

沸きたつ彼の胸を心底から癒しはしない。

ファウストが実際そのようであることを我々は認めざるをえないし、地上で我々に出会う彼はいかにもそうであろう。しかしそれは——悪魔の目から見てそうなのである。混乱、分裂、ファウストの魂の苦しみに満ちた緊張といったすべてのものの中にメフィストフェレスは否定の要素である欠乏、無力、愚かしさ、そして狂気を感じ得る。否定的なものがあたかも自立した存在をもち、しかもそれが事物の本来的なものであるかのように見えず悪魔本来の誤りである否定的なものの肯定が、ここでまた再び明らかとなる。

ファウストの魂の中には勿論混乱が、拮抗する力と努力の相反する働きが見られる。しかしそのカオスとは——人間的なもののなかにおいてと同様に宇宙的なものの領域において——悪魔が考えるようなただ単なる乱雑な無秩序、無意味な混乱ではなくして、それはあらゆる創造と実り豊かな発酵の母胎なのである。カオスは澄み切った状態に対立するものではなくして、いわばその前提である。そこからやがては神が望むような形式が生み出されてくるのであり、その形式は始原以来その中において胚珠として埋もれているものである。それは外から舵取りされ、介入されることを必要としない。万物の一切においてそうであり、人間においてまた然

りである。素晴らしい主の言葉がそのことを物語っている。

たとえ彼は今は混乱しながら私に仕えているにしても、

まもなく彼を澄み切った境地へと私は導いていく。

小さな苗木に緑の芽がふく時、庭師は
いつかはそれが花と実をならせることを知るものだ。

まさに混乱の中から、そしてそこからのみ澄み切った状態が生れてくる。またこういうことも出来る。即ち、混乱が大きければ大きいほど、澄み切った状態は確実であると。平均的な人間の本質の中には初めからある種の秩序が支配している。平均的な人間の秩序は自らの内的な世界の狭隘さと全くそのみすばらしさに起因している。それにも拘らず、主の言われる澄み切った状態は激しい嵐の後の大気の透明さと、清らかさに比べることが出来る。そのような澄み切った状態はただ、情熱の嵐が吹き荒れ、思いがけなく悪徳の限りが尽くされ、雷雨のような激情の荒れ狂った後にのみ人間の魂には見られる。

ここに、悪魔に対して向けられた「お前はまた好きな時にいつでも現われるがよい」という主の確約の最も深い理由がある。それ故にメフィストフェレスをすげなくとり扱うことがここでは問題ではないし、そんな必要もない。しかもファウストが弛みがちになることから守られる必要もない。このようなことはどっちみち彼の本性とは相容れることがない。同様にファウストの魂がただ暗い力によって戯れの対象となったり、試みられる餌食となるというようなことも考えられない。しかもこの魂が「大きな、かけがえのない宝」であるとメフィストフェレスが気づく時に、どうして主がこの宝を手放したり、不確かなものの保護のもとに置いたりするようなことがあるだろうか？

（悪魔の干渉なくしても）人間の中に存在

し、そして人間の類い稀な本質に基づく対立の緊張は最高度にまで高められるべきであるということ、それだけが神の意図でありうる。メフィストフェレスはいずれにせよファウストの本性の中に素質として存在しないようなものを何一つとり出して見せることが出来ない。しかし彼はただそれが類い無く強烈にあらわとなる

ことに貢献しうるのみである。

テキストは KARL WOLFF, FAUSTS ERLÖSUNG (NEST-VERLAG NÜRNBERG, 1948) の第一章 MYSTERIUM による。

(1990年10月17日受理)